

発行日 2006年4月20日 編集 広報委員会
発行 日本パーソナリティ心理学会(旧・日本性格心理学会)
事務局 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-4-19 (株)国際文献印刷社内
電話 03-5389-6243 FAX 03-3368-2822 URL <http://www.soc.nii.ac.jp/jspp>

【巻頭言】 心を追究する科学は Wellbeing を目指す

大坊郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

心理学の研究は、人が含まれる「場」をプロセスとして捉え、そこから得られるものがわれわれにとって現実的に意味あるものとならなければならない。さらに、人は他者とのつながりを先天的にも後天的にも持ち、さらにマクロな広がりの中に生活していることを如何に反映したものであるのか、その日常性を限りなく追究していくかが重要である。

研究の対象は、生活する社会的な環境に含まれている要因のいずれともかわり、対象を狭い範囲にくくることはできない。したがって、少なくとも他者とのつながりで個人をすることもマクロに社会体制や文化についての検討を含めどのようなアプローチも必要である。しかし、個々の研究の価値は決して中性的ではない。どのような人間観、社会価値を踏まえたことであるのかは大事である。

人間の幸福や健康が目指されるべきことであることに大方は同意されるであろう。さらに、現実の生活の出来事に働く規則性や原理を探り、かつ、それを基にして、現在よりも適応的に行動する方法を人びとに提供することである。そのためには、目指される目標は心理的健康を高め、他者との適応的な関係を築き、相互協調的な社会を築くことこそが、心がけられなければならない。その研究は人間にとってどのような意味を持ち、価値を持つのかは常に考えられなければならない。

昨今、人間の尊厳を軽視した研究やその質よりもアウトプットすること自体に価値をおく

自己満足的な姿勢が一部に見られることは科学倫理を損なうものである。このようなことを考えるならば、人間としての価値、社会的な価値と切り離して研究するという安易さを優先するために、科学的探究を中性的な次元で(一種の真空的な空間で)扱ってきた過去が現代に災いしていると言えよう。

われわれの日常生活の表面にも、深層にもたくさんの真実があり、どのような見方をするかによって、あいまいにも鮮やかに見えるものである。心の集積としての社会が問題になる心理学においては、“wellbeing”のための科学であることを一層明確に標榜すべきであろう。すなわち、目指すべき価値をどこにおくのか、われわれの適応、幸福を追究する科学、研究であるということを明らかにし、個々の研究がどのように貢献できるのか、またどのように価値を求めるのかを問い続けるべきである。

どの領域の研究であれ、研究の先に目指す価値、研究方法の質(その成果がわれわれにとって持つ価値につながるのかを熟考した綿密な計画を立て、真実の追究と福利が考えられる)結果から何を、どこまでを読み取るのかなどが重要である。例えば、得られた結果・事実だけが一人歩きすることはない。研究者がそれをどのような文脈で検討し、何を主張したいかが問われなければならない。

このことを一層認識し、自分の姿勢を含め、後につながる人々に伝える責任があることを肝に銘じたい。

第 14 回大会報告

大会委員長からの報告

大会委員長:堀毛一也(岩手大学人文社会学部)

第 14 回大会を 11 月 12 日(土)・13 日(日)に岩手大学人文社会科学部で開催させていただきました。遠方での開催にもかかわらず、予約参加者 147 名、当日参加者 40 名、合計 187 名の方にご参加いただき、おかげさまで大盛會となりました。懇親会にも 62 名の出席をいただき、楽しい歓談の一時をすごすことができました。本当にありがとうございました。

例年ならば落葉も終わり、寂れた光景の中での開催になるところ昨秋は暖かさが続き、キャンパスにも彩りが残ってありました。近在に出かけられた先生方も、各地の光景を多少はお楽しみいただけたと存じます。1 週間後には急に寒さが厳しくなり、雪も舞いましたので、本当に恵まれていたと思います。

シンポジウムやワークショップもおかげさまで、大勢の方のご参加をいただきながら盛り上げていただき、いずれも滞りなく終了することができました。コーディネートいただきました先生方には、あらためて厚く御礼申し上げます。ポスター発表も大勢の先生方にご参加いただき活発な論議がかわさってありました。個人的な関係者が大会発表賞を頂戴いたしており、開催側として大変恐縮致しております。

大会運営にあたっては、本学部の院生・学生の方々に多大な協力を仰ぎました。心より感謝申し上げます。ただ、不慣れなもので、ご参加いただきました皆様には礼を失した点多々あったかと存じます。何卒ご容赦賜りますようお願い申し上げます。

末筆ながら、大会運営にあたりましてご尽力賜りました杉山理事長、北村事務局長はじめ理事会の先生方、また織田大会事務局長はじめ大会準備委員会の諸先生方、その他賛助・ご支援いただきました諸社・諸氏の皆様、そして何よりもご参加いただきました諸先生方にあらためて心より深謝申し上げます。

学会大会活性化特別委員会からの報告

担当委員 内山伊知郎(同志社大学)

松田英子(江戸川大学)

村井潤一郎(文京学院大学)

当学会年次大会を活性化する目的の一環として、日本パーソナリティ心理学会第 14 回大会にて「研究相談コーナー」および「優秀大会発表賞」を設けました。

「研究相談コーナー」は、主に大学院生の方を対象に、担当者が研究の相談にのる場です。担当者には、学会の常任理事の他、大会でのシンポジウム、ワークショップのパネリストの先生方をゲストにお招きしました。連日 2 時間ずつ開催し、延べ 50 名を超える相談者が訪れる盛況ぶりでした。とりわけ、ワークショップ「縦断研究による因果関係の推定」に関する相談では、指定討論者の先生に質問者の列ができるなど、このテーマに関する関心の高さをうかがわせるものでした。

「優秀大会発表賞」は、大会での研究発表から、1)内容の分かりやすさ、2)ディスプレイの工夫、3)研究の独創性または着眼点の新しさ、4)当該もしくは近接領域への寄与、5)研究方法の妥当性、という基準から優秀な発表者を選出するものです。今回は、一般会員 2 名、院生会員 4 名を上限にして選考しました(受賞対象は筆頭発表者のみ)。選考委員による投票を集計し、常任理事会にて審議した結果、以下の 5 名(発表番号順)の方に、優秀大会発表賞をお贈りすることになりました。受賞者の皆様、おめでとうございます。

堀毛裕子氏(東北学院大学教養学部)

高橋雄介氏(東京大学大学院

総合文化研究科・日本学術振興会)

若松輝美氏(岩手大学大学院

人文社会科学研究科)

吉江路子氏(東京大学教養学部生命・

認知科学科)

外山美樹氏(日本学術振興会・東京成徳大学)

表彰は、2006年の大会時の懇親会にて行う予定です。副賞としまして、この表彰を行う懇親会にご招待させていただきます。なお、計15名の投票者によってお名前の挙がった発表は24件あり（大会での研究発表にエントリーされた発表件数は82件）、この24件のどれか特定の発表に票が集中するということはありませんでした。いずれも甲乙つけがたい発表であったことのあらわれだと思われま

す。年次大会の盛り上がりは、学会の活性化に直接つながるものだと考えます。今回の「研究相談コーナー」「優秀大会発表賞」の試みにつきまして、会員の皆様からの率直なご意見を賜れば幸いです。

優秀大会発表賞受賞者からのコメント

堀毛裕子（東北学院大学教養学部）

受賞対象はしばらく継続している研究の一端ですが、正直なところ十分に内容を深める余裕がないままの発表でしたので、受賞を知り内心忸怩たる思いがあります。しかし、パーソナリティ・臨床・健康・社会心理学等の領域の狭間のようなテーマでこれまで研究を続けてきたことに、OKという保証を少し頂いたようで素直にうれしくもあります。中年期ゆえか他の仕事に追われがちですが、研究の比重と質を高めるよう励みたいと存じます。

高橋雄介

（東京大学大学院総合文化研究科・

日本学術振興会）

この度は、発表賞にご選出頂きまして、大変嬉しく光栄に思っております。質問紙にご回答頂きました調査参加者の皆さま、ご指導を頂きました共著者の先生方ならびに日夜苦楽を共にしている繁樹研究室の皆さまに心より感謝申し上げます。今回のポスター発表で取り上げた素因ストレスモデルが、より良い方法で検証、精緻化されていくことを目指し、更なる向上心を持って、今後の研究活動に励んでいきたいと思

若松輝美（岩手大学大学院

人文社会科学研究所）

名誉ある賞をいただき、大変光栄に思います。第14回大会では大会参加だけでなく、事務局を努めさせていただき、そちらのほうでも、大変貴重な経験をさせていただきました。事務局をやりながらの大会発表ということで、納得のいく研究発表だったとはいえませんが、今回の受賞を励みに、これからも研究を続けていこうと思

います。最後に、第14回大会を盛り立ててくださった皆様に心よりお礼申し上げます。

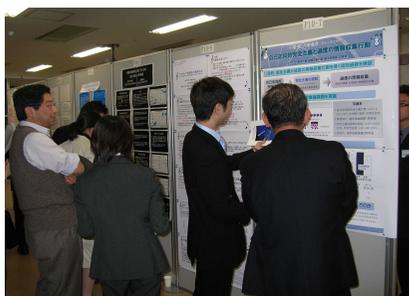
吉江路子（東京大学教養学部生命・

認知科学科）

この度は、素晴らしい賞をいただき、本当にありがとうございます。この研究を進めるにあたって、指導教員の繁樹算男教授、繁樹研究室の皆様、丹野研究室の皆様には、きめ細かなご指導を賜りました。また、盛岡での発表の際には、多くの先生方に有益なアドバイスをいただきました。厚く御礼申し上げます。今後も、演奏家の皆様のお役に立てるよう、研究に取り組んでいきたいと思

います。

外山美樹（日本学術振興会・東京成徳大学）
この度は、新たに創設されました優秀大会発表賞を賜り、大変光栄に存じております。本発表では、多くの方々から貴重なコメントをいただきました。また、調査にご協力いただきました小学校の関係者のお力なしに本研究を実施することはできませんでした。この場をお借りして、お礼を申し上げます。今回の受賞に力を得て、今後も研究を発展させていきたいと思



今回の「ミニ特集」は、「近接領域からみたパーソナリティ」と題して、3名の研究者にそれぞれの専門領域からみたパーソナリティについて綴っていただきました。

行動遺伝学からみたパーソナリティ

山形伸二（東京大学大学院総合文化研究科・日本学術振興会）

パーソナリティは、様々な精神疾患や認知能力などと並び、行動遺伝学の主要な研究テーマのひとつです。多くの研究から、パーソナリティの個人差はおよそ 30~50%が遺伝の影響により説明され、残りの 50~70%が非共有環境（同じ家庭のメンバーでも共有していない、個々人に独自の環境）の影響により説明されることが一貫して報告されています。しかし、行動遺伝学が明らかにしたパーソナリティとは、このように「どの特性は遺伝率が何%」として記述されるものに過ぎないのでしょうか。そうではありません。

この記事では、「遺伝率」というパーソナリティの静的な記述にとどまらない、新しい行動遺伝学の方向性をふたつご紹介したいと思います。

安定性と変化の行動遺伝学

行動遺伝学はひとつの形質についての遺伝率を明らかにするのみならず、ふたつの形質間の相関関係にどの程度遺伝が寄与しどの程度環境が寄与しているのかを明らかにすることができます。

例えば、双生児を対象とした縦断研究でふたつの時点における外向性得点が得られたなら、その安定性（二時点間の共分散）や変化（二時点目に独自の分散）にどの程度遺伝と環境が寄与しているかを明らかにすることができます。

このような縦断的研究の数はまださほど多くありませんが、それらの結果はパーソナリティの安定性には遺伝が、変化には非共有環境の

影響が大きいことを示唆しています。

最近では潜在成長曲線モデルを適用し、より詳細に変化のパターンに遺伝と環境がどう寄与するかを検討した研究も報告され始めています。

今後具体的な遺伝子多型の情報や環境の測度をデザインに組み込むことにより、パーソナリティの発達における遺伝と環境の役割がより詳細に明らかになるものと期待できます。

遺伝環境交互作用

遺伝率は「ある集団内の個人差にどれくらい遺伝が寄与しているか」という指標ですので、当然集団が異なれば遺伝率も異なってきます。例えば、都市部と田舎ではアルコール摂取量に与える遺伝の影響の大きさが異なりますし、社会経済的地位の高い層と低い層では子どもの知能に与える遺伝の影響の大きさは異なることが報告されています。

このような遺伝環境交互作用を検出することは、遺伝的に優れた資質を持っている場合にそれをより伸ばすような環境を用意できる可能性や、遺伝的な脆弱性を持っていてもそれが発現しないような環境を用意できる可能性を示唆する点でとても重要であり、今後ますます多くの研究がなされると予想されます。

私自身も、このようなパーソナリティの発達や変化における動的なメカニズムを検討していきたいと考えています。

神経生理学から見たパーソナリティ

佐藤 徳 (富山大学人間発達科学部)

Eysenck の「パーソナリティの生物学的基盤」が刊行されたのが1967年です。それ以降、近年の遺伝子解析、非侵襲的脳機能測定法の発達によりパーソナリティの生物学的基盤に関する研究は劇的に増えました。

今では「パーソナリティとは遺伝と環境双方に規定された脳の活動パターンの個人差である」と主張しても何ら過激な発言と受け取られないでしょう。

ここでは遺伝子研究を少し見てみましょう。例えば、有名なセロトニン・トランスポーター遺伝子多型とパーソナリティとの関連を調べた初期の研究では、S型をホモまたはヘテロで持つ者は、L型をホモで持つ者に比べて、NEO-PI-Rの「神経症傾向」が高く、「協調性」が低いことが報告されています。

1000人以上の調査対象を23年間追いかけた研究では、ストレス・イベントに対して、S型をホモまたはヘテロで持つ者の33%が抑うつ症状を示したのに対し、L型をホモで持つ者で抑うつ症状を呈したのは17%だったと報告されています。

最近では、「genetic imaging」などと呼ばれておりますが、遺伝子多型と課題中の脳反応との関係を調べる研究も盛んです。そうした研究では、S型を持つ者は、恐怖刺激に対して、L型を持つ者に比べて、より扁桃体の活動を示すことが報告されています。

遺伝子が脳の活動に影響を及ぼし、それにより不安や抑うつ脆弱性因子が形成される。

脳を媒介に遺伝子と行動を結びつける見事な研究です。

しかし、注意が必要です。遺伝子多型とパーソナリティの関係は、セロトニン・トランスポーター遺伝子を含めて、何度か追試されておりますが、結果はまちまちです。

仮に両者に関係があるとしましょう。しかし、パーソナリティ形成に寄与する遺伝要因の中でさえ単一遺伝子で説明できる率はほんのわずかです。

セロトニン・トランスポーター遺伝子でさえせいぜい遺伝要因の7%から9%だろうと見積もられています。

遺伝要因を特定するだけでも、多遺伝子の交互作用を考慮する必要があります。もちろん、「脳の活動パターンの個人差」に影響を及ぼすのは遺伝要因だけではありません。

Eysenck は、ともすれば、特定の脳システムとパーソナリティとの関係を一対一対応の関係にあると見なしがちでした。

内向的な人は網様体を中心とする覚醒システムが活性化しやすい。神経症傾向の高い者は「内臓脳」(いわゆる辺縁系)が活性化しやすいというわけです。

直線的な関係にあるなら「処方」は簡単です。しかし、Zuckerman が批判するように事態はそんなに単純ではありません。何よりそれぞれのシステムは高度に相互依存的な関係にあります。

1つのシステムが複数の特性に関係し、1つの特性が複数のシステムの影響を受ける。見るべきは、それらの関係性のパターンではないでしょうか。

キャリア発達とパーソナリティ

松浦素子（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科）

先日美容院で、「美容師って、続けるのが大変なんだ。」という話を伺った。美容師は、資格を取れば就職率自体は高いものの、定着率は芳しくないというのだ。担当してくれた方には同期入社した美容師が100名いたが、3年後には1割しか残らなかったという。辞めた後も、他の店に移って美容師を続ける者もいるが、美容師そのものを辞める場合も多いという。

近年、新卒者が3年以内に離職する割合が3割を超えるなど、キャリア発達は重要な課題となっている。これまでキャリア発達の領域では、仕事の継続や職務満足感を高める要因として適職探しに焦点が当てられてきた。

適職とは、個人のパーソナリティと仕事の性質のマッチングと考えられる。このときパーソナリティは、本人の興味、関心、態度、能力の総称として扱われている。例えば美容師の仕事は、顧客のニーズに対応する技術だけでなく、接客業としてのサービス性と共に、表現者としての芸術性などの側面がある。そして最終的には顧客からの指名による予約件数が、彼/彼女らの昇進や給与の指標となる。そのため流行に対応する新しい技術の修得や、薬品に関する勉強、接客技術の向上はもちろんのこと、体力的に厳しい仕事でありながら、夜遅く休日休めないなどの勤務の不規則さにも耐えうる心身の丈夫さもまた、適性を考える際、重要な要因であると考えられる。

「この仕事は、とても繰り返しが多いんです。基本的な技術はそんなに多くはないので、1日の中でも、何度もカーラーを巻いてははずしたりと、体調が悪かったりすると眠くなるくらい

同じ作業の繰り返しです。」

パン屋はパンを何度も焼き続けるように、美容師も同じ作業の繰り返しなのだ。実はこの繰り返しに対する耐性そのものにもパーソナリティが何らかの影響を持っており、適職を探る際のパーソナリティの役割を捉える重要な鍵があるのではないだろうか。繰り返しを苦痛に感じる度合や、単調な繰り返し中にも小さな楽しみ・やりがいを見出せるといったこと、あるいはその先にあるもっと大きな目標やキャリア展望を失わずにいられるのかといったことは、個人の気質や志向性というパーソナリティ概念そのものであると考えられる。

仕事の継続という就職後のキャリア発達を考える上では、こうしたパーソナリティも考慮することが重要であろう。

アルバイト雑誌や転職雑誌には、好きなことが仕事になることの楽しさや喜びが紹介されている。このことは実は、多くの人が自分の仕事を好きだと思っていないことや、楽しく仕事がしたいという願望の裏返しのようにも思える。しかし適職とは必ずしも、好きな仕事とは限らない。“辞めずに続けていける仕事である”ということもまた、適職の指標といえるのではないだろうか。

最後に、担当の美容師はこういった。「普段は、お客さんの話ばかり聞いているから、それも結構疲れるんですよ。なんだか、今日はこちらの話ばかり聞いてもらって・・・」。私は自分の研究上の関心から、熱心にミニ・インタビューしてしまったとは、とても言えませんでした。

【研究余滴】

知識の流通・消費のガバナンス、およびその教育の必要性

荒川 歩(名古屋大学大学院法学研究科)

近年、いわゆる臨床心理学以外の場面でも、研究者が「現場」に出て行くようになった。それに伴って、大きく2つのことが変わった。

第1に、「基礎」と「応用」の密接な関係を主張する研究者が増えた。

第2に、「科学的知識」を直接現場に持ち込むことの限界が見えた。

たとえば、もともと「科学的知識」であったものが神話化して流通し問題を起こす場合があることがわかった(よく言われる 歳時神話なんてのがよい例だろう)。心理学の知見を現場の人にそのまま伝えても、実践者はどう使っているのか分からないことが分かった。

この1つの原因として、心理学教育の偏りが挙げられるだろう。

知識には、生産・流通(分配)・消費の3つの側面があるのにも関わらず、現在の大学院教育では、残念ながら、(臨床心理学が専門で無い限り)知識生産の方法しか習わない。

Evidence に基づく知識を伝える時、どのような問題が起こりえるのか、何に配慮すべきなのかを学んだ経験のない人が現場で発言することに問題はないだろうか？

この流通を消費の問題について、現段階では3種の対応が可能だろう。

1つ目は、市民は科学的知識(たとえば統計)に対する理解能力がないので、学問的知識に秀でた専門家が市民をもっと啓蒙する必要があ

ると考えるもの(科学社会学でいう「啓蒙モデル(欠如モデル)」)である。

2つ目は、これまで学会や学会誌に投稿するだけで知識の流通や消費に無神経だった研究者も、流通や消費についてまじめに考え、適切な流通方法を模索すべきだと考えるもの(私は「知識が科学的に正しいかではなく、その知識が流通した場合のリスクを『物語りのリスク』として付与する」という言い方をする)である。

もう一つは、研究者は、市民の声に耳を傾け、市民が求める形式での知識の産出方法を模索して、それを学問として行なう可能性を模索すべきだと考えるもの(私はこれを、Narrative-Based-Medicine に倣って、Narrative-Based-Sciences と名づけた)である。

これらのうちどの方法をとるにせよ、これからの大学院教育では、知識の流通や消費をどのように管理していくかを学ぶ必要があるだろう。不特定多数の人に知識を発表する場合にどのようにその知識のリスクを管理するのか、特定の消費者に向けて発信する場合にどのようにその消費者の需要を見極め、需要にあった心理学的知識を、需要にあった形態に加工して届けるか、など、知識の流通に関する教育方法を模索していく必要があるだろう。